

「見よ、種まきが種をまきに出て行った。」(マタイによる福音書 第13章3節)主イエスは1つのだたとえ話をされました。本来、たとえ話は分かりにくい事柄を解きほぐして分かりやすくするものです。しかし主イエスのたとえ話は、私たちに神の国の真理を明らかにします。

主イエスは集まった大勢の人々に、今まかされている種がどういうものか知ってほしいと思われました。ガリラヤ湖畔に向かってすり鉢状に斜面がある場所に船をつけて話すと、円形劇場にいるように声がよく響くと考えられました。主イエスにはそこにいる人の姿が見えたはずで、神と等しい力をお持ちですから、1人1人の心の深みを知ることがおできになりました。

小脇にお盆のような物を抱えてそこからパラパラと種をまく人の姿は、古代から中世に地中海やヨーロッパでよく見られた風景でした。特にこのパレスチナ地方では土地を耕す前に種をまいたようです。あるものは道端に落ち、すぐに鳥がついばんでしまう。あるものは石地に落ちて根を張ることができず干からびてしまう。かろうじて地面に落ちたと思えば、いばらがその上を覆って日を浴びることができず、伸びることができなくなってしまう。しかし良い地に落ちた種は100倍、60倍、30倍の実を結ぶ。

主イエスがお語りになったたとえ話は、そのまま読めばごくありふれた農村の出来事です。しかし、主は説明をなさいます。種をまくのは父なる神だ、種とはあなたがたにまかれる神の言葉だ。そして道端、石地、いばらはそれぞれの人の状態のことだ。

道端、それは神のみ言葉を最初から聞こうとしない人のことだ。石地にまかれたものは喜んで受け入れるけれども、やがて困難な状況、迫害や痛みが起こるとすぐに枯れてしまう。いばらの中は様々な誘惑によって、成長が阻害されて、実を結ぶことができない。この様な土地は私たち自身だと思えます。主イエスは、私たちの心の状態を全部ご存知ですが、それでもなお、神が救いの言葉を私たちの心にまいてくださると言うのです。

この話を聞いた人々なら誰でも良くわかったことが1つあります。良い地に落ちた種も、農夫が手入れをしなければ決して実らないということです。雑草を取り、水をやり、鳥から守り、手入れをします。主イエスは、そして父なる神

は私たち1人1人のことをよくご存知です。その上で神は、私たちが豊かな実を实らせ、豊かな命を生きるように選び、種をまき、手入れをしてくださるのです

そして一番肝心なのは種の力でした。種に命があり、どんな場所でも芽を出して伸びようとする力がそこに蓄えられています。主イエスは心の奥底を見通しながら、あなたにまくこの種、救いの約束は、力のある本当の約束だ。父なる神はあなたを耕し、手入れをし、良い地にして豊かな実りを、確かな命をあなたに味わわせる。そうお語りになるのです。

今から498年前の10月31日、ドイツの小さな町ヴィッテンベルクで1人の信仰者マルティン・ルターが95の問いかけの文書を教会の扉に釘付けにしました。人が救われるのは信仰によってではないかという問いでした。当時の教会は土壌が問題だと考え、ある基準を満たす良い土地になったら神に喜ばれ、祝福を受けて大きな実りを得ると考えていました。マルティン・ルターは聖書を読み直して気づいたのです。私たちがどれほど自分で自分を耕そうとしても、土地には良い土地になる力はない。そうではなくて、神が私たちを愛し、耕し、良い土地にし、力ある種をまいてくださるので確かな実りが約束されている。聖書にはそう書いてある。そう言って始まったのが、宗教改革でした。

宗教改革は、礼拝改革、教会改革でした。教会が変わりました。ただ神の憐れみ、恵みによって、神の約束の言葉が私たちの内にその力を発揮して、芽を出し、根を張り、豊かに繁り、命の実を結んで下さると信じるようになったのです。

代々の教会は2000年にわたってこのたとえ話を語ってきました。そのたびに、神に選ばれ、愛され、耕され、休むことなく手入れをされる土地とされたことを感謝しました。神がまいて下さる聖書の言葉、その種を1つ1つ宿らせて生きていくように招かれていることを喜んで歩んできたのです。主イエスは今日もここで私たちを招き、私たちに呼びかけ、私たちを生かして下さっています。神の言葉、主イエス・キリストの言葉は力ある種です。私たちにまかれた種は確実に芽を出して、私たちを生かして下さる力ある種です。

(記 説教要約奉仕者)